

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究（C）一般

研究期間：2010～2012

課題番号：22500549

研究課題名（和文）就学前体育における教授—学習内容の体系化と系統化への  
活動論的アプローチ

研究課題名（英文）A Study of Systematization of Teaching and Learning Contents  
in Pre-school Physical education with an Activity Theory Approach

研究代表者

中瀬古 哲（NAKASEKO TETSU）

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：00198110

研究成果の概要（和文）：就学前 5 歳児の体育授業並びに課業づくりに 3 年間継続的に参加した（述べ 7 施設、総計 160 回）。そこで、身体運動文化（運動遊び）の特質解明と類型化を試みた。その結果、以下のことが示唆された。(1)就学前に培うべき基礎的技術能力は、①姿勢制御、②物や人の動きに対する予測・判断、③スピード・リズムのコントロール、の三つに分類できる。(2)身体運動文化（運動遊び）は、幼児の生活課題・発達課題を含みこんだ総合的な活動であり、それらを踏まえ内容化した学習課題を構想する必要がある。

研究成果の概要（英文）：It participated in the class-making of the five year old Child's physical education in kindergarten for three years. (7 places and 160 times in total) Then, human movement culture (Children's play) were analyzed and considered. As a result, the following suggestion was obtained. (1)The fundamental abilities which should be cultivated before entering school are following three. Body control, Prediction and judgment over a motion of a thing and a person, and Control of speed and a rhythm. (2)Human movement culture (Children's play)is the synthetic activity containing infantile life subject and developmental task, and needs to conceive of the learning task which based on them and contents-ized them.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：体育科教育

### 1. 研究開始当初の背景

#### ◆保育所保育指針の改訂と保育課程

2008 年 8 月、我が国の保育所保育のガイドラインである保育所保育指針が改訂され「保育課程」という概念が明示された。そこでは、保育の質を充実させるために、発達段

階に応じた保育内容を組織的・計画的に構成し、計画—実践—自己評価を常に行なうことの重要性が指摘されている（厚生労働省・保育所保育指針解説）。

しかしながら、これまで保育実践現場では、組織的・計画的な教授—学習活動を標榜する

「保育課程」や「カリキュラム」という概念は、必ずしも快く受け入れられてこなかった。そのため、2008年改訂からは、これまで局長通知であった指針が厚生労働大臣の告示となり、法的拘束力をもって、保育課程（カリキュラム）の構成・計画、実践、並びに自己評価というマネジメント・サイクルの実践現場への浸透が図られている。

そこでは、就学をも視野に入れた課程の構成・計画が求められており、その前提となる教授—学習内容の体系化と系統化が急務となっている。

#### ◆就学前教育における身体運動文化の位置

保育指針においては、就学前教育の内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域で示されており、いずれの領域においても、具体的で楽しい総合的な活動（生活・遊び）を媒介に基礎的力を培うことが目指されている。身体運動文化は、主要には「健康」領域に関わるものであると考えられているが、その総合性ゆえに、すべての領域において有益な機能を有しているとも考えられる。実際、就学前の子どもの発達は、現象的には、新しい身体運動或いは動作獲得のプロセスであるといっても過言ではなく、身体運動文化の教授—学習内容の体系化・系統化は、保育課程づくりに大きな影響を与えると考えられる。一方で、就学前体育は、体力づくりの名の下、運動量や活動量に還元され、活動のもつ総合性が蔑ろにされた教授—学習内容が、容認され、それこそが体育の独自性として強調される素地も残っている。身体運動文化の教育的機能を生物学的なレベルの体力に矮小化することなく、その活動の総合性を保持しつつ尚且つ体育教育の固有性或いはアイデンティティが追及されねばならない。これは、就学前固有の課題ではなく、本質的には、体育科教育の課題であるとも考えられる。

#### ◆体育科教育のアイデンティティと正当化をめぐる論議

体育科教育のアイデンティティや正当化をめぐる論議では、「スポーツの技能習熟の保障に加えて、何よりも、文化を『知の体系』としてとらえ」た「スポーツ文化の学習」が要請されるという主張がある。（友添秀則『体育科教育』2001年4月号）あるいは、市民の生活の質の改善に貢献する「運動文化への参与」を図り、そのためのコンピテンシーのレポーターを獲得させることが学校体育の責務であるという正当化のテーゼならびに学習領域の構成が示されている。（図1参照）（Bart Crum, 2008 日本スポーツ教育学会第28回大会特別記念講演）

以上のようなことは、体育科教育における「指導内容の明確化・体系化」あるいは「系統化」を図ることが研究課題の焦点となっ

ていることを示唆している。

## 2. 研究の目的

本研究は、就学前体育における教授—学習内容の体系化と系統化を図るために、幼児を対象とした身体運動文化の体系と学習主体を媒介とする活動理論を方法論的基盤として、次のような研究課題について理論的な解明と実践的検討を試みることを目的とする。

◆体育的活動に関わる保育内容・教材の体系化に資する先行研究・典型実践の整理検討。

◆幼児を対象とした身体運動文化（運動遊び）の特質の解明と類型化。

◆仮説プログラムの構築と仮説プログラムの実践的な検証と改善（実験的実践）。

## 3. 研究の方法

### I：身体運動文化（運動遊び）の素材研究

①運動遊びの特質を解明し類型化を図るための基準や方法の検討：これまでの実践研究で明らかとなった運動遊び、全国レベルの典型実践において扱われている運動遊びを分析対象とし、その素材の特質を解明し類型化を図るための基準や方法を検討する。

②運動遊びの享受形態の多様性と基礎となる技術学的・技術論的な体系の追求：体育・スポーツの文化研究の諸成果から文化的特質の異質性や多様性の理解を深める。そこから共通基礎となる技術学的・技術論的な体系化を探求する。

### II：身体運動文化（運動遊び）に関わる保育内容研究

③基礎的運動能力、基礎（技術）、運動指導に関する先行研究・実践成果の検討：運動技能の獲得に関連して、運動能力と技能の関係を整理検討する。また、基礎（技術）の捉え方や技術指導の系統性に関する先行研究と実践成果について再整理・再検討する。

④技術学的・技術論的な体系を基盤とした保育内容の体系化・系統的な構成：文化的特質に規定された身体運動、身体運動の場、手段の目的合理的な体系化の内実、科学性、歴史的な展開、社会的な現実形式などについて探求する。さらに身体運動文化に関わる保育内容を構成する原理・原則や基準の検討を経て保育内容の体系的な構成について原理的に考察する。

⑤保育内容としての単位の抽出と系統化の探求：文化的特質についての理解に基づき、単位の分析・抽出の方法質的転換を含む内的発展過程の論理を検討する。（ヴィゴツキー、柴田義松訳「思考と言語」新訳版、新読書社、2001）

### III：実験的・試験的実践研究

⑥発達段階にそったカリキュラム（保育内容）の編成：幼児の発達段階にそったカリキュラム編成を試みる。実践フィールドとの連

携・協働のプロジェクトの下、理論仮説的なカリキュラム編成と保育現場との実際とをつき合わせながら現実的な編成作業に共同して取り組む。

#### ⑦単元構成として仮説プログラムの作成

単元レベルの教材づくり教授—学習内容の系統化を図り仮説プログラムを作成する。実践フィールドのプロジェクトでは、プログラムの実践を基盤としてカリキュラムマネジメントを試みる。

#### <2010年度の計画>

(1)「①運動遊びの特質を解明し類型化を図るための基準や方法の検討」と「③基礎的運動能力、基礎（技術）、運動指導に関する先行研究・実践成果の検討」を重点的に進める。

(2)「②運動遊びの享受形態の多様性と基礎となる技術学的・技術論的な体系の追求」について、文化研究が進んでいる典型的な対象を選び資料を収集し考察を進める。

(3)「④技術学的・技術論的な体系を基盤とした保育内容の体系化・系統的な構成」については、いくつかの典型教材を対象に技術学的・技術論的な系統について考察し、保育内容を構成する原理・原則や基準の検討を含めた原理的考察を試みる。

(4)実践フィールドとの連携・協働によるプロジェクトを立ち上げる。

#### <2011年度の計画>

(1)「②運動遊びの享受形態の多様性と基礎となる技術学的・技術論的な体系の追求」について、引き続き対象を広げながら資料を収集し考察を進める。

(2)「⑤保育内容としての単位の抽出と系統化の探求」について、単位の分析・抽出の方法並びに系統化の論理を明らかにし、身体運動文化・保育内容の領域における基礎技術と技術の系統を仮説的に導出する。

(3)「⑥発達段階にそったカリキュラム（保育内容）の編成」「⑦単元構成として仮説プログラムの作成」については、保育現場においてカリキュラムマネジメントに協働参画する。

#### <2012年度の計画>

(1)「⑥発達段階にそったカリキュラム（保育内容）の編成」「⑦単元構成として仮説プログラムの作成」については、引き続き、保育現場においてカリキュラムマネジメントに協働参画する。一連の諸研究課題の成果を実践ベースで研修する最終年度の最重要課題。

(2)「②運動遊びの享受形態の多様性と基礎となる技術学的・技術論的な体系の追求」については、教材づくりにつながるような実践的な必要性に焦点化していく。

## 4. 研究成果

### <2010年度>

公立保育園（I E保育園 4回、T保育園 11回、Y保育園 7回）、私立保育園（KN保育園：8回、NN保育園：6回）、公設民営保育所（SK保育所：9回、M保育所：11回）の設置形態の違う保育施設7箇所を対象に、合計55回のフィールドワークを実施した。延べ、212名の就学前児童（5歳児）のボールゲームの教授—学習活動を中心に、約1年間に渡って保育園における身体運動文化に関わる教育（＝保育）実践を継続的に観察した（実施期間：2010年4月2日～2011年3月10日）。その結果、身体運動文化（典型的運動あそび）を題材とした、教授—学習活動に関わる知見を得ることができた。

まず第一に、本年度の調査においては、統計的には、運動あそび場面で認められる社会的行為（コンビネーションプレーや積極性等）と、日常生活における社会性（向社会性）の間には、優位な相関が認められなかった。調査項目や手続き等方法論上の課題も存在するものの、両者を直線的な因果関係で捉えることの危険性を示唆していると考えられる。第2に、ボール遊び（的あてゲーム）を通して、投動作の習熟のみならず、予測判断能力の形成も可能であることが示唆された。第3に、保育園における活動としての運動遊び（＝子どもにとって意味のある身体運動文化）は、概ね、リズム遊び、ボール遊び、水遊び、鬼ごっこ、散歩・かけっこ（歩・走）、木登り・そり滑り、手具遊び（剣玉等）、が認められた。第4に、ボール遊びの典型教材の一つとして、「的あて」と「シッポとりゲーム」が位置づく可能性が確認できた。第5に、水遊びにおける典型教材の一つとして、「変身浮き」が位置づく可能性が確認できた。

### <2011年度>

公立保育園（I E保育園 5回、Y保育園 3回）、私立保育園（KN保育園：10回、NN保育園：9回）、公設民営保育所（SK保育所：10回、M保育所：10回）の設置形態の違う保育施設6箇所を対象に、合計47回のフィールドワークを実施した。延べ、195名の就学前児童（5歳児）のボールゲームの教授—学習活動を中心に、約1年間に渡って保育園における身体運動文化に関わる教育（＝保育）実践を継続的に観察した（実施期間：2010年4月20日～2011年3月8日）。その結果、身体運動文化（典型的運動あそび）を題材とした、教授—学習活動に関わる知見を得ることができた。

まず第1に、子どもアクティビティ尺度（2005年鈴木ら）を援用し、担当保育士による評価という間接的な視点からではあるが、ボールゲームの習熟度と社会性の発達度合いとがリンクする可能性が示唆された。調査項目や手続き等方法論上の課題も存在するため、両者を直線的な因果関係で捉えること

は危険ではあるが今後も慎重に検討を進めたい。第2に、ボール遊び(的あてゲーム)を通して、予測判断能力の形成が可能であることが示唆されたものの、厳密な意味での投動作(オーバーハンドスロー)の習熟においては活動の前後の調査で顕著な効果が確認できなかった。第3に、保育園における活動としての運動遊び(=子どもにとって意味のある身体運動文化)で培う能力は、概ね、①姿勢制御の能力(リズム、水遊び)、②予測・判断の能力(鬼ごっこ、ボール遊び)、③スピードやリズムをコントロールする能力(散歩・かけっこ)の三つに収斂されるのではというカリキュラム構成上の仮説が示唆された。

#### <2012年度>

公立保育園(I E保育園6回, T保育園5回, Y保育園5回), 私立保育園(KN保育園:10回, NN保育園:10回), 公設民営保育所(SK保育所:11回, M保育所:11回)の設置形態の違う保育施設7箇所を対象に, 58回のフィールドワークを実施した。延べ, 207名の就学前児童(5歳児)のボールゲームの教授-学習活動を中心に, 約1年間に渡って保育園における身体運動文化に関わる教育(=保育)実践を継続的に観察した(実施期間:2012年4月12日~2013年3月7日)。その結果, 身体運動文化(典型的運動あそび)を題材とした, 教授-学習活動に関わる知見を得ることができた。

まず第1に, 2012・2013年度の研究成果を踏まえ, 自己主張スキル並びに予測判断能力という視点から実験を行った結果, ボール運動遊びにおける技能習熟と子どもの社会的発達に密接な関連があることが確認できた。第2に, 就学前における「体育カリキュラム」は, 小学校学習指導要領の内容領域に大きな影響を受けていること, しかしながら, 保育実践現場における体育的指導は, その総合性のゆえに, 初等教育における枠組みでは捉えきれない複雑性を有していることが確認できた。第3に, 2013年度に引き続き, ①姿勢制御の能力, ②予測・判断の能力, ③スピード・リズム制御の能力, の三つの視点がカリキュラム構成上の重要な視点になりうるということが示唆された。

以上, 身体運動文化(運動遊び)の体系化・系統化へむけて得られた知見は以下の通りである、

表-1 基礎的技術能力と教材=運動あそび

基礎的技術能力	教材=運動遊び
姿勢制御	固定遊具、マット、跳び箱、鉄棒、水泳、竹馬
物や人の動きに対する予測・判断	ボール運動、鬼ごっこ
スピード・リズムのコントロール	なわとび、ケンパ、川とび、ゴムとび、ジグザグ走、うずまき走、鬼ごっこ

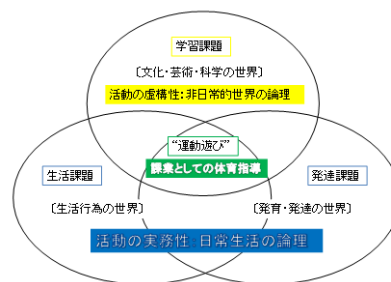


図-1 教授-学習内容の構造

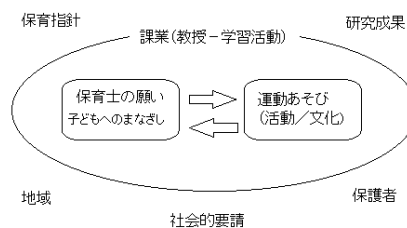


図-2 カリキュラムづくりの基礎

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①中瀬古哲, 子どもの「発達課題」と体育の教授-学習活動, 査読無, 楽しい体育・スポーツ, 第30巻第1号, 2011年, 12-15.
- ②中瀬古哲, 教室で, 子どもとともに体育・スポーツの意味を問い直そう, 査読無, 楽しい体育・スポーツ, 号外, 2011年, 179-182.
- ③中瀬古哲, 体育のグループ学習, 査読無, 楽しい体育・スポーツ, 第30巻第10号, 2011, 22-23.

〔学会発表〕(計1件)

- ①中瀬古哲, 就学前体育のカリキュラム開発に関する実践的研究(3), 日本教科教育学会第37回大会, 2011年11月12日, 沖縄大学.

〔図書〕(計2件)

- ①学校体育研究同志会編, 新学校体育叢書・水泳の授業, 創文企画, 水遊びで育てる(就学前・小学校低学年の水泳指導), 2012年, 73-76.
- ②中瀬古哲, 子どもの発達と運動会-就学前体育カリキュラム論序説, かもがわ出版, 2013年, 108.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中瀬古哲 (NAKASEKO TETSU)  
 県立広島大学・人間文化学部・教授  
 研究者番号: 19500510

### (2) 研究分担者 無

### (3) 連携研究者 無